

2001.5.16

「如新会」の名の経緯について

中島 信一郎

[史記、鄒陽伝]

諺曰、(有)白頭如新。傾蓋如故。何即知與不知也。(佩文韻府はいぶんいんぷによる、「有」は他に有るものあり)

諺に曰く、白頭新たなるが如しと。蓋を傾けること故の如しというあり。何なればすなわち知と不知となり。

諺に、白頭如新(白髪に至るまで交わっても、お互いに心を知り合わねば新しく知ると同じ。転じて、朋友がお心知らなかったことを謝することをいう。)と傾蓋如故(孔子と程子とが車の蓋を傾けて挨拶をし話し合っただけで、それまでの不知の期間を越えて親しくなった故事から、一見して親しむことをいう。)との二つがある。

何故かといえば、不知であったがゆえに知にいたれば如新、知に至ったがゆえに不知が知のごとくなる如故のように、知と不知との関わり合いだからである。

史記 鄒陽伝のこの言葉をこのように解釈しておりました、確か平成5年の3月の修士論文発表会後の「いわし亭」での懇親会での席上であったと思いますが、このような心をこめて、我々の集いを「如新会」と名付けてはどうでしょうかとご提案申し上げたところ、並み居る先輩同期後輩の立派な皆さんの力強い拍手をいただき出発したものであります。(或いは如故の方が肯定的である思ったが、日本的にはやや否定的な意味合いの方が強いので、如新の方を選んだ。)

それからすでに8年経ちましたが、歴代の幹事の方々の素晴らしいセンスで受け止められて、これまで持ちこたえられてきております。どうか今後ともこの名に恥じない立派な自主的な力強い会への発展されることを祈願いたします。

おわり

注:鄒陽は、漢景帝の学者。佩文韻府は四百四十四卷。清の康熙帝こうぎてい(1654~1722)の勅撰。